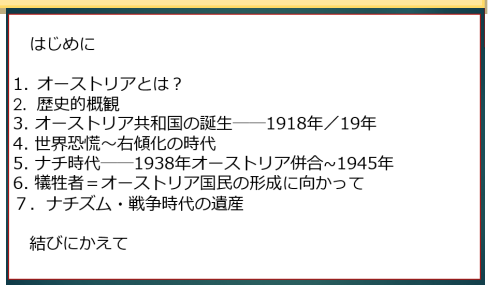
Die Eiche ディ アイヘ
http://www.jdg-chiba.com

Japanisch-Deutsche Gesellschaft der Präfektur Chiba
〒270-2214松戸市松飛台556-12
Tel./Fax: 047-385-1456
Mail: info@jdg-chiba.com
協会Home Page

# 明治大学文学部 水野教授 講演受講報告

青壮年部長 勝見 浩明

青壮年部 ドイツ歴史研究会は、7月28日、明治大学文学部水野教授に講演をお願いいたしました。タイトルは、「光と影のオーストリアーモーツァルトとヒトラーを手がかりに」です。




講演内容/水野先生講演資料から抜粋

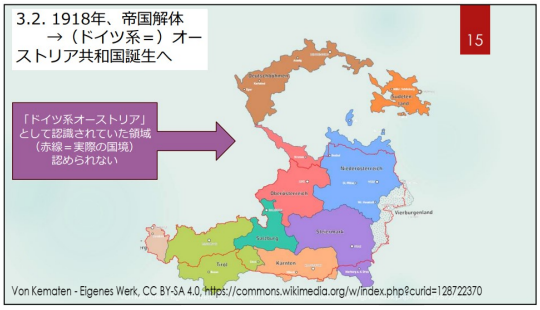
今回、このオーストリアのテーマを取り上げた背景は、ここ数年、継続的に千葉県日独協会の会員でもおられる神戸大学大学院国際文化学研究科 衣笠講師に住民の国家帰属についての意識についての講演をお願いしました。一連の講演を通じ、旧ドイツ領におけるシレジア、エルザス＝ロートリンゲン、ベルギー、デンマークの国民意識の形成を学びました。一方、オーストリアについては、多民族国家のイメージが強く、どのように国民における国家意識が形成されたのか知見を得たいと思い、この分野のご専門でおられる明治大学の水野先生に相談し、快く、当協会でのご講演を引き受けてくださいました。当日は、最終的に約70名の方々が、このオンライン講演に参加くださいました。多くの他地区の日独協会の会員の皆様にもご参加いただきました。当日の講演についての感想も少なからず頂戴しましたが、オーストリアの歴史について新たに知ることができて有意義であったというようなポジティブなメッセージをいただきました。主催者としては、喜ばしい限りとなります。

水野先生講演資料から抜粋

1910年前後の地図帳、ネーションの分布が日常使う言語でネーションが示される。言語区分でドイツ人、チェコ人、ハンガリー人の居住地域が示されている

水野先生は、歴史世界を捉える際に、ネーション（国民、民族）が主役となったのは、ヒトラーが青年期であった1910年頃であるとし、そうした国民意識は、19世紀を通じて徐々に形成されたとのことでした。冒頭、水野先生は、講演の導入として国民意識の成立の前段階の状態としてモーツァルトの活動時期、すなわち、18世紀後半の欧州の様子をお示しになりました。確かに当時の地図を見ると数多い領邦国家で成立しており、明らかに「ネーション」というより、「領主」が帰属意識のベースになっているのはわかりました。講演の中でモーツァルトが生まれたころのザルツブルクは、ハプスブルク家領ではなく、神聖ローマ帝国であったので、広い意味でドイツに帰属していることから、モーツァルトがドイツ人かオーストリア人化する動きに影響するのは興味深かったです。

18世紀後半からプロイセンの台頭、プロイセンとオーストリア間の戦いなどを経てまた徐々に社会全体の体制も貴族階級から市民階級の台頭の変化を通じ、徐々に領邦という視野から日常的に使っている言語は何か。どれか一言語を選択して統計を取る手法が採用。使っている言語で国家を意識する機運が醸成されるとの水野先生のお話はとても興味深かったです。1918年の第一次世界大戦後、オーストリアは、民族的にもハンガリー、チェコなどを失い、ドイツ語使用地区とされたチェコのズデーテン地方、その他、多くのドイツ語使用地区を失うという右の図初めて拝見しましたが、とても印象的でした。




水野先生講演資料から抜粋

1918年帝国解体後、オーストリアに帰属できなかったドイツ語使用住民の居住区

非常に興味深かったのは、第一世界大戦後、ウィルソンによる民族自決の原則が唱えられたにもかかわらず、オーストリアでは、国家名を「ドイツ系オーストリア共和国」、更に隣国ドイツとの関係においては、「ドイツ共和国の一構成地域」とまで宣言。意識レベルでドイツとの一体感を鮮明に打ち出していることでした。戦勝国である連合国からは、ドイツの国力増加は認められないとのことで拒否されます。敗戦国は、民族自決主義の適用は許可されませんでした。また、オーストリア共和国への吸引力という点でとても興味深いのは、ザルツブルクやティロールでは、オーストリアから脱し、ドイツとの統合を目指す住民投票の動きがあったというポスター資料を見せていただきました。ザルツブルクの住民投票ポスターでは、「ドイツ人よ、団結せよ」（←労働者よ、団結せよを意識したスローガン）、ティロールのポスターも「ティロール人、立ち上がれ」と訴え、オーストリアへの帰属意識より強くドイツへの帰属を求める意識があるのは、新鮮な驚きでした。

水野先生講演資料から抜粋（一部加筆）

オーストリアからドイツへの帰属を呼びかけるポスター

この後、深刻な経済恐慌が起こり社会不安が増大、ハンガリー、イタリア、ドイツ、オーストリア各国で右傾化が顕著。オーストリアの右傾化がドイツとイタリアのはざまに入り、当初、イタリアの右傾勢力を保護にした政治運営がなされますが、徐々にドイツのナチによる圧力が強まります。この段階にきてようやくドイツとは異なるオーストリア独自の差別化が強化された点は、とても分かりやすかったです。ただし、「ハプスブルク時代からカトリックの伝統を継承するより良きドイツ人国家」、「ドイツ人の連邦国家を定めるため、オーストリア人民は、この憲法を授けられる」などオーストリアとしてのアイデンティティの確立に着手しつつも、ドイツ人と定義しています。ドイツからの外圧が強まり、1938年3月にオーストリア政府は、自国の国家独立の国民投票を実施しようとしますが、ドイツの妨害で実施できませんでした。ヒトラーが、同年3月15日にウィーンの英雄広場において、オーストリアのドイツへの「編入」を宣言しますが、この参加者数が現在の研究者の見解で

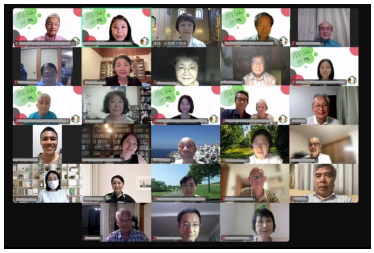


次ページへ続く→

は、25万人程度と考えられている点は、とてもクリアになりました。国家帰属に関しては、ヒトラーによるオーストリアの国民投票により、賛成99.6%の信任でドイツとの併合を国民は選択します。19世紀を通じたNation意識の高まりと同時に強まった反ユダヤ主義がドイツとの併合によりさらに激しくなります。ユダヤ人の迫害についても水野先生は、動画含めて示してくださいました。背広を着た紳士が道路の清掃をひざまずいて行ってますが、取り巻く観衆が微笑みをうかべているのです。異様な風景です。

第二次世界大戦後のオーストリアの立ち位置の設定。これがとても興味深かったです。斯様にドイツとの併合を選んだ政府及び国民が、1943年連合国が発表した「オーストリアに関するモスクワ宣言」、これには、オーストリアの犠牲者としての記述と加害者としての記述の双方がありますが、犠牲者の記述に比重を置き、「オーストリアはヒトラーの侵略政策の犠牲となった最初の国家」としたのでした。「犠牲者テーゼ」と水野先生は説明なされました。結果的には、1955年にオーストリアが主権回復時に加害者としてのテーゼは外されるのですが、「犠牲者」に属するオーストリア内の定義がファシズムの犠牲者、戦争犠牲者、さらには元ナチをも含む包含した範囲で「犠牲者」とされているプロセスがとても興味深いと思いました。

結果的にオーストリアにおける過去の「影」の部分に向き合うのは、1980年代後半以降。ヴァルトハイム国連事務総長がナチ及び戦争犯罪との関係に嫌疑がかかった時点。戦後、35年も経過した時点であるのも特異な事実だと思いました。水野先生のご説明はとても多岐にわたる情報をゆっくりと丁寧にわかりやすくご説明くださいました。オーストリアの国民の意識から国家レベルの時代変遷まで多様な事項をわかりやすくご説明くださったと思います。ありがとうございました。



講演終了後の参加者記念撮影

## 平尾先生を偲ぶ会

### 会員　田中 正延

3月に89歳で亡くなられた平尾浩三先生を偲ぶ会が７月27日昼、船橋市で開かれました。お馴染みのイタリアレストラン。一般のお客さんもいて遺影やお花もありませんでしたが、先生を慕う会員18人が和やかにお別れを告げました。

この会の準備に尽力された須古正恒さん（発起人）が「若い会員は先生を知らないので協会主催ではなく、懇意の方で」と経緯を話して黙祷に。参会者の瞼に先生の笑顔や声音が蘇り、哀惜の気持ちを新たにしていました。

小野浩さん（同）が平尾先生の２代目会長として主導された３つの特別行事を紹介しました。来場者が千人を超えた「ドイツに親しむ３日間」(2005年)、多数の日独関係者を招いた「当協会創立10周年」(2006年)、29協会が参加の「全国日独協会連合総会」の運営主管を務めたこと。「平尾先生は“身の丈にふさわしい”行動をモットーにされていましたが、この成功体験が協会活動の大きな力に」「今ある当協会の礎は平尾会長在任中に築かれたもので、今後の協会運営に確実に引き継いでほしい」と結びました。

献杯の発声を指名された私（田中正延・同）が先生を「碩学の人」として尊敬してきましたと述べ、「先生のお話しは脱線の妙、色気もあり、まさに*Hirao World*。魅力溢れるものでした」。

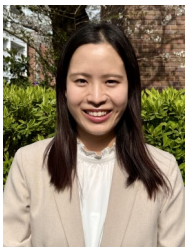
会食の後、木戸裕会長（同）が先生のNHKドイツ語講座を学んだことなど参会者がそれぞれの思い出を語りました。渡邊邦美さんが先生直筆の年賀状を披露したのも心に残りました。ここ10年ほどの賀状に添えられた歌の中から、・・・。

**若き日を　ほのかに苦く　また甘く**

**友は語れる　ワイン片手に**（2018年）

## ドイツ大使館主催 Sommer-Partyに参加して

### 常任理事　竹内 優

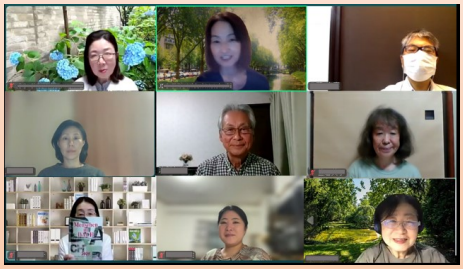


6月14日（金）18:30から、ドイツ大使館の事務棟にてSommer-Partyが開催されました。本パーティーは大使館主催のビュッフェ形式の懇親会で主に全国の日独協会の若手会員を対象としており、千葉県日独協会からは神田基成さん、風間康宏さん、私（竹内）の3名が参加しました。冒頭に大使館、そして日独協会の柚岡一明常務理事からご挨拶があり、各参加者はそれぞれネットワーキングやドイツ料理、音楽を楽しんでいました。学生の姿もちらほら見られ、大使館で普段開催される格式高いレセプションとは少し異なり、若くエネルギーに満ちた雰囲気に溢れていました。会の後半、千葉県日独協会からの参加者3名は植松事務局長の紹介により、ドイツ出身で香川日独協会に所属するロバート・ホフマン（Robert Hoffmann）さんとも知り合うことができ、日本語とドイツ語を混ぜながら楽しく会話をすることができました。個人的には2018年に金沢で行われた全国日独協会連合会の若者交流で知り合った名古屋・大阪の日独協会の会員との再会や、日独ユースネットワークの皆様との交流もあり、非常に有意義な時間を過ごしました。日独交流当事者によるこのような対面での会の重要さを改めて実感しました。

## 2024ドイツ語講習会開催報告

昨年まで秋冬に開催されていたドイツ語講習会ですが、今年は５月から６月にかけて毎週土曜の夜計６回、木戸芳子当協会理事を講師にお迎えし、昨年と同様オンラインで開催しました。受講者は会員・非会員併せて計８名、うち１名は四国から参加されましたが、これもオンライン講習の利点と言えます。

テキストは『**Menschen in DACH・トピックス10 2024年度**』が使用されました。「DACH」とは、ドイツ語を母国語とするドイツ、オーストリア、スイスを指す言葉で、同本には、近年話題となった、ドイツ語圏の人々の文化や社会制度に関連する１０のトピックスが収録されています。講習会では「ザルツブルク音楽祭」・「ドイツにおける失業給付制度」・「コロナ禍が学校教育にもたらした影響について」に関する３つのトピックスが取り上げられ、文法や語彙表現を学びながら、各々の内容についてディスカッションを行いました。又、授業後には、トピックスに関連した参考資料も講師から提供されました。受講者からは「複数の方々と一緒に読むことで、刺激を受けると同時に、文脈の意味を丁寧に学ぶことの大切さを改めて実感し、とても有意義でした」というご感想もいただき、大変充実した講習会となりました。



（常任理事: 本間実里）

# 2024年度の青壮年部活動について

本年度の青壮年部の活動は、会員相互の知見の交流による組織の活性化、内部知見の集約、その結果として対外発信、対外交流力のアップを意図して行いたいと思っています。

ドイツ歴史研究については、従来のボトルシップ研究を本名さんを中心に展開しつつ、先月末に実施した明治大学文学部　水野先生による講演会、年末には、会員であり神戸大学大学院国際文化研究科衣笠講師による講演を予定しています。これまでのテーマの延長として追放されたドイツ人をフォーカスを当てる予定です。その他、ドイツ歴史研究の自由参加メンバー内で各自が持っているドイツ歴史知見の交流を図るなど、今年度は、会員相互の交流を軸に知見の内部醸成に力点を置いた活動を展開したいと思っています。

「音楽聴こう」活動にて8/12町田イタリア歌劇団公演G. Verdi AIDAを会員と鑑賞。写真:Amneris 役を魅力的に演じたメゾソプラノ高橋未来子さん

ドイツ地誌研究については、志賀顧問によるドイツの街紹介に加え、南木会員によるドイツの街の紹介のシリーズ化を予定しています。ご期待ください。

新たな試みとしては、目下、Facebook等SNSにて連日、ドイツ語圏関連の情報共有を行っていますが、自由参加による時事問題の共有活動ができないか検討を着手しました。2025少し先になります。難易度高い点ありますが、ドイツ語母語者と日本語話者とのミックス言語による交流会の実現ができないか検討中です。

すでに実際に街にでかけて活動する動きも始まっています。「音楽を聴こう！」という気軽に関心ある音楽分野に会員連れだって行こうという活動です。既に3回実施、継続します。参加自由です。関心おありの方は、勝見までご一報くだされば幸いです。ドイツ好きが実践する組織内のオアシス（←会長リクエスト）の実現を目指します。（常任理事/青壮年部長: 勝見 浩明）

## 青壮年部員 保坂理事からの一言

青壮年部の活動の一環として、歴史研究会主催のイベント運営に携わってまいりました。各回のテーマには共通する問いや一連の流れがあり、少しずつ知識が積み重なっていく感覚を覚えています。また、魅力的な講師を招き「アイデンティティ」などの奥深いテーマを扱っている為、会員外からの参加も多く、結果的に千葉県日独協会の広報活動にも貢献していると感じます。

現在、青壮年部は新たなフェーズに入り、異なる分野での活動が知識の深化を目指して始動しています。私は、特にドイツ時事問題の活動に取り組んでいきたいと思います。

## 新入会員紹介（風間 康宏）

初めまして、千葉県市川市出身の風間康宏と申します。

私は、かねて日本の検察官として働いており、仕事の関係で、昨年２月から１２月までの間、ドイツのデュッセルドルフに滞在しておりました。デュッセルドルフで暮らしつつ、ノルトライン＝ヴェストファーレン州内の複数の司法関係機関を訪問し、ドイツの刑事法を研究していましたが、滞在期間中、現地の司法関係者をはじめ、沢山の方々にお世話になりました。

私はそれまで海外旅行の経験も多くなく、ヨーロッパでの滞在も初めてだったのですが、実際に生活してみて、ドイツの自然の豊かさや日本とは異なる諸制度など、とても新鮮に感じ、滞在期間全体を通して、非常に充実した時間を過ごすことができました。

このような機会を頂いたことも何かの縁かなと思い、帰国後もドイツ関連のコミュニティーに属したいと考えていた中、皆様の御活動を拝見し、この度入会させていただいた次第です。なお、現在もドイツ語の勉強は続けており、今後、皆様からドイツに関する様々なことを教えていただければ大変有り難く存じます。

これからお世話になりますが、何卒よろしくお願い申し上げます。

# 小学時代からのドイツ文学への傾倒

ドイツと私　-武井 曜子-

昭和初期に生まれ育った私、ドイツとの縁は小学生の頃からです。太平洋戦争が始まり、ドイツは同盟国として、日本と共に米英を相手に戦ったのです。

その頃一年生になった私に父が買ってくれた本が、ドイツの1800年代の女流作家アグネス・ザッパーの「一年生物語」の和訳本でした。戦前の平和なドイツの家庭で一年生になったグレーチェンの日常生活を読んで、ドイツに対する親近感が育ったのです。

「一年生物語」原書

戦争が激しくなり、東京は頻発する空襲に脅かされるようになり、私たち小学生は集団疎開で群馬県の榛名山に行きました。その間もずっとこの本は座右にあり、親から離れて暮らし、親が今日にも東京の空襲で死ぬのではないかと不安でたまらなかった時機に、この本は私の唯一の慰めになったものです。

1945年８月の終戦を迎え、幸い空襲で焼けなかった家に戻り、無事だった両親と暮らせるようになりました。

戦後の日本はアメリカ一辺倒、映画、ジャズ、野球がブームになりましたが、アメリカ映画の中でドイツの軍隊や兵士が出て来ると、非常に蔑んだ扱いをするのが私にはとても不愉快で、アメリカを好きになれず、私の気持ちはますますドイツびいきに傾いて行きました。

戦時中は英雄として崇められていたヒットラーの悪評は、知るのが辛くてなるべく遠ざけて知らずにいたい気持ちでした。

中学時代の私は文学趣味に傾き、当時の若い少女たちに人気絶頂だったリルケの詩に夢中になり、自分も詩を書いていました。そのうち日本語訳では物足りなくなり、リルケの詩をドイツ語で読みたい一念で、大学は独文科を選びました。

私たちの時代は、語学の勉強は「読み、書き、文法」が第一、会話や日用語などは全然習いませんでした。独文科でもドイツ人の先生は一人だけ、ボルファルト先生という方がおられました。後で知ったのですが、ユダヤ系の方で、戦時中にドイツから亡命して来日、早稲田大学が全面的に庇護して終戦を迎え、戦後、独文科の教授になられたとのことです。授業では主に詩を読ませて下さったと記憶していますが、全然日本語を使わず、説明もドイツ語なので、私にはチンプンカンプン全然分かりませんでした。

著者

大学では「ドイツ研究会」というクラブがあって、独文科の先輩に勧められて入部しました。ドイツが大好きな先輩たちのおかげで、ドイツ大使館の方々との接触も多く、いろいろの企画で楽しく勉強もさせてもらいました。講師をやって下さった重光綾子先生は、戦中戦後の外務大臣だった重光葵氏の甥である重光晶氏の夫人で、スケールの大きい、素敵な方でした。13か国語を自由に話されるとのこと、独研の優秀な先輩たちの畏敬の的でした。夫君はソ連大使、ナイジェリア大使などを歴任。綾子さんは「知らない国へ行ったら、街へ出て知らない言葉を耳で聴いて、リズムで覚えるのよ」とおっしゃるけど、晶氏は「綾子の言うのは我々日本人には無理だよ。」と笑っていました。晶氏は、「異国に赴任が決まったら、その国の国語の基本文を全部暗記して行くんだ。覚えた文章は耳で聞いても解るからね。」とおっしゃったけど、私にはそれも絶対無理！やっぱり偉くなる方は違うんだなあ、とため息をつきました。

1986年に、上記の重光綾子先生を中心に「Freundeskreis Deutscher Spracheドイツ語婦人会」が発足して、続いて1989年に「Am Brunnen日独婦人交流会」が出来て、どちらも役員さんたちが熱心にいろいろ企画して楽しませて下さっています。夫君の転勤で日本に来ているドイツ婦人たちにもとても役に立っているようです。

ちなみに、大学生の頃、手を尽くして上記の「一年生物語」の原本を入手し、改めてグレーチェンの物語をドイツ語で読みました。その後ドイツへ旅行した時にも、折に触れ、この本を思い出して懐かしんだものです。

# ドイツの街紹介

## ハルツ地方の小さな魔女の街Goslarから Göttingen そして Kassel

顧問　志賀 久徳

コロナパンデミック以前の年の6月に、東のドレスデンから西のデユッセルドルフまで、各地をレンタカーで巡る2週間余りの旅で宿泊した町の中から、ゴスラーとゲッティンゲン、そしてカッセルを紹介します。

高速からGoslarへの入り口

ドイツ到着の翌日、レンタカー会社に行くと、ベンツEクラス(ドイツ語でエー、英語のAと勘違い)の車を用意しましたよ、と言われ、Aは予約車より小型？と思いながらガレージに行くと、上位モデルE型だったので、とてもラッキーなスタートが切れました。

ホテルの前に停めた車両

そして、10日目には人口約4万人のハルツ地方の小さな町、ゴスラーに着きました。10世紀ごろから始まった銀鉱山の採掘により大いに栄え、旧市街とランメルスベルクの旧鉱山はユネスコの世界遺産に登録されています。ほとんどの家が中世に建てられた木組みの家であり、魔女の町としても知られています。主峰ブロッケン山から箒にまたがった魔女たちが降りてきた、とする伝説があり、毎年4月末日の夜にそのお祭りが行われています。ドイツ統一前は山を挟んで旧東独との国境に近く、監視が繰り返された歴史も、今では古い家並みを残した閑静な町です。

Goslar市庁舎前

この町から約50キロ余り南へ進むとゲッティンゲンに着きます。旧市庁舎やグリム兄弟も教鞭を執り、多くのノーベル賞受賞者を輩出したゲッティンゲン大学があり、また、マルクト広場では青空市が開かれていて、古風な中にも活気のある街並みです。

Goslarの閑静な街並み

ここでは、突然の嵐に遭遇し、強い風雨で大木が折れ、まるで中世ヨーロッパの絵画にあるような風景を目にしました。

Göttingen市庁舎前

次の町、カッセルはメルヘン街道の中心に位置し、グリム童話集の編集者で世界的に有名なグリム兄弟が長く暮らした公園の多い町です。グリム兄弟広場には二人の像があり、市内にはグリムワールド（GRIMMWELT）博物館、また、高台には世界遺産のウィルヘルムスヘーエ公園があり、公園ではお城、水の芸術、等が見られます。朝食の時、イギリスのEU離脱をTVで知り、とても身近な出来事に感じました。

Kasselのグリム兄弟像

日曜日に最終目的地のデユッセルドルフに着いてレンタカー事務へ行くと、ドイツらしく休みでした。車の返却に困っていると、ドイツ人の若者から、近くのタワーパーキングに止めて、キーは設置された無人箱に放り込めばよいことを教えてもらい、難を逃れました。

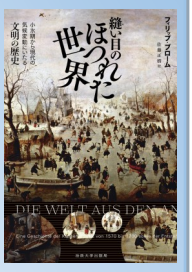
Düsseldorfのライン川沿いに立つ筆者

デユッセルドルフは古くから日本企業の進出が盛んで、かつて駐在していた1980年代頃は日本人村とも言われ、現在も毎年5月頃にJapan Tagが開催されているほどの関係ですが、今世紀に入り、韓国及び中国企業の進出も盛んなようです。

時代は変われども、いつまでもドイツとの交流を深めたいものです。

# 書籍/Buch

## ■縫い目のほつれた世界―小氷期から現代の気候変動にいたる文明の歴史




フィリップ・ブローム 著／佐藤正樹 訳　法政大学出版局

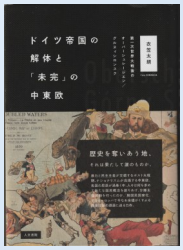
定価（本体3,600円＋税）

本書は、以前ご紹介した『あるヴァイオリンの旅路――移民たちのヨーロッパ文化史』の著者フィリップ・ブロームの翻訳２作目です。

16世紀から17世紀にかけてヨーロッパを覆った「小氷期」は干ばつ・飢饉・疫病を引き起こしましたが、それが社会的変化をもたらし、芸術・文化、思想にも大きな影響を与えました。人々は気候変動に適応し始め、工夫によってこれらの危機を克服しようと、資源や労力の節減と合理化等の新技術、社会経済の革新等が進んでいきます。ここから農業革命、やがて世界貿易へと道が開かれ、今日の私達の社会の基礎が築かれました。

本書では、この「小氷期」が、当時の社会・生活文化にどのように影響を与え、経済的・社会的危機をもたらしたかを検証しています。また、文化・思想の大改革を担った啓蒙主義者達についても記述し、今の世界で起きている危機に対し、彼等の功績と過ちから教訓を読み取ろうとします。今こそ「小氷期」の歴史に学び、行動すべきとも本書は警告しています。混沌とした現代において、一読の価値のある一冊です。（常任理事：本間実里）

## ■ドイツ帝国の解体と「未完」の中東欧




Die Eiche No.142でも紹介しました会員衣笠先生の著書が「その年に刊行されたドイツ語圏に関する最も優れた学術図書に日本ドイツ学会より受賞されました。おめでとうございます。木戸会長から衣笠先生に祝辞が述べられました。

●日本ドイツ学会のホームページ（2023年度日本ドイツ学会奨励賞 日本ドイツ学会（jgd2.sakura.ne.jp)に、受賞作の紹介、奨励賞選考委員会による選考経過と受賞理由、受賞挨拶（当日、先生はポーランド在のため、ビデオメッセージの全文）が掲載されています。（常任理事: 勝見 浩明）

# 今後の予定

**■杜のコンサート（土屋常任理事、土屋実穂さん出演）**
**日時　2024年9月1日　15:00開演（14:30開場）**
**場所　ALKASコンサートサロンアルカス**
**●チケット完売となりました。**

**■習志野ドイツフェア&フードフェス2024**
**日時　2024年9月21-22日　（予備日23日）**
**11:00-19:00**
**場所　JR津田沼南口モリシア1階センターコート**

**■いちかわドイツデイ**
**日時　2024年10月5日 11:00-16:00**
**場所　ニッケイコルトンプラザ**
**●詳細は、別途、ご案内致します。**

# 会員情報

**新人会員**　堀 智弘　習志野市

**法人会員**　医療法人 同和会　千葉病院、社会福祉法人清和会、（株）京葉ビル管理、（株）和幸電気工事、バイエルンストゥーベ by ダンケ

# 編集後記

2024年度スタートから４か月経過しました。本号において紹介しましたように実際の活動が行われています。青壮年部においては、従来の各種の研究グループでのドイツ語圏の知見を深める活動とともに実際外に出て活動する動きも始まりました。具体的には、「音楽を聴こう!」活動です。ジャンルは問いませんが、現在、オペラや歌曲のコンサートに行く活動を数回実施済です。この分野の音楽は、その背景であるドイツだけでなく、欧州全体の社会構造、変化も捉えることができて音楽の素晴らしさと同時に当時の社会も把握できます。本号で紹介したAIDAとともにヴェリズモオペラで有名なR. Leoncavallo作曲「道化師」を会員と鑑賞、演奏への強い感動とともに知見を深めました。一緒に音楽と歴史的背景を深めましょう。勝見